

## 雷神信仰と雷法の展開

劉 枝 萬

- 一 雷神信仰
- 二 雷法
- 三 雷法行使の事例
- 四 掌心雷
- 五 臺灣の雷法
- 六 結語

### 一 雷神信仰

古から農本主義を奉じて來た中國社會では、敬天思想が殊に濃厚であり、民間信仰の一大特長をなしているのである。けだし、「風調雨順」という氣象が、とりもなおさず豊年を意味し、これこそ「國泰民安」の基礎であるから、

自ずから天象を畏敬する觀念を醸成するに至ったのも、當然の推移であろう。而して數ある天象のうちでも、大空に轟きわたる雷鳴と、萬物を焼き盡くす雷火が、とりわけ顯著で、雷神信仰が容易に成立するゆえんでもある。さらに、落雷による擊殺は、ついに専ら天に替って道を行い、惡人を誅殺するという雷神の機能を生み、畏怖の對象として、深く民間信仰に入り、今に至っているのである。事實、雷神天誅説話は、かなり古くから認められ、筆記小説に散見し、後世では、善書の流通と相俟って、勸善懲惡怡好の題材として利用され、枚擧にいとまなく、現在でも「五雷轟頂」或いは「五雷蓋頂」<sup>1)</sup>が、天罰の極刑として、

誓詞の常套語になっており、臺灣では悪事に對する訓戒叱責の極言に、「雷公共你扒尻脊」（雷神に引き裂かれる）や

「雷公點心」（雷神のおやつにされる）がある。

早期の雷神としては、『山海經』に、雷澤に龍身人頭の雷神があり、また黄帝が雷祖を聚めた<sup>(3)</sup>と見えており、東海流波山の雷獸も雷神であると解されている。<sup>(4)</sup>『楚辭』「離騷」<sup>(5)</sup>にも雷雨を主る神である雷師が登場し、『淮南子』<sup>(6)</sup>には後世最も普遍的な名稱となる雷公が見えている。すなわち漢代において、雷神信仰がすでに根づき、進化し出したと思われるのであるが、當時、天象に對する觀察の進歩、天文學の發達も一因であらう。

道教はあたかも漢代に起り、天師教が勃興し、いくたの盛衰を経て、今日に至るまで永續したことはよく知られている。而してその巫術的體質は、民間信仰と明確な一線を劃し難く、創教當時より深くかかわりあつて、教勢の擴張をはかったから、雷神信仰も利用されたであらうと推測されるのである。

風土から見て、華北の少雨乾燥地帯における雷鳴は珍し

く、従つて雷神信仰はむしろ育ちにくいのに反して、長江以南の多雨高濕地帯、とりわけ沿海地方は雷雨の本場として、その下地を具えており、雷神信仰の中心が、雷州半島に擬せられるゆえんでもある。すなわち、廣東雷州府の雷神廟がこれであり、卵生の陳文玉が歿して廟祀され、雷神になったという獵奇的緣起が、諸書に喧傳されている。要するに、天師教の本山が江西に移つてから、遍く華中以南を主要教圏としたのと、地域的にはほぼ一致しているのである。換言すれば、超自然的靈力を持ち、氣象を左右し得ると信じられた巫師と、雷神信仰の接點なのである。

雷神の系統をたどれば、まず氣象の神格化である雷公が擧げられる。これは稻妻神たる電母に配して夫婦神となり、或いは風伯・雨師を加えた四神組でよく知られており、人びとの生活と密着しているため、起源としては最も古いと考えられ、説話が多見し、現在でも醮祭に勸請されたりして、崇拜されている。次が五行思想の所産として、五行あるいは五方に配した五雷元帥の五神組がある。畫像の圖柄にあしらわれたり、雷神の通稱として用いられた

り、稀に廟祀もされているが、必ずしも五尊揃わず、一尊で代表させていることもある。さらに現實の政府組織を反映した、天廷における雷部があり、進化した構想である。その主宰を雷祖大帝あるいは雷尊と稱し、雷鳴の神格化である九天應元雷聲普化天尊をこれに擬している。經典には『玉樞經』<sup>(8)</sup>と『玉樞儀』<sup>(9)</sup>（雷祖儀）があり、雷の威力を發揮して驅邪消災する神として説かれている。而して現在、普化天尊と言えば、聞太師の稱號であると一般に受け取られている。ただし、通俗小説『封神演義』<sup>(10)</sup>で、聞太師がこの職に封ぜられて雷祖となり、雷部二十四員を統率し、雲を起し、雨を降らせ、悪人を誅し、良民を安んずるとされているからである。然るに前記の雷州廟神陳文玉の誕生日を、『搜神記』（『續道藏』本）では六月二十四日となしているが、これは實は普化天尊の神誕に他ならず、かかる誤謬を牽強付會と見るよりは、むしろ雷部主宰としての普化天尊の地位が確立されたため、大勢に押しまわられた混淆現象とすべきであろう。なお、雷部の中級神としては、雷霆第三判官たる袁千里<sup>(11)</sup>があり、下級神には雷火を主る謝仙<sup>(12)</sup>、雷

車を推す阿香<sup>(13)</sup>、疾走する律令<sup>(14)</sup>など、一連の雷鬼があり、甚だしきは供物を強要する、最下層の雷奴たる阿三<sup>(15)</sup>が想定されているのも一興である。その他、雷部には屬しないが、『封神演義』でめざましい活躍をする雷震子もなかなか人氣があり、臺灣で醜場に勧請される天京衆神の掛軸にもあしらわれたりする。

## 二 雷 法

雷法とは雷を行使する法術のことで、法術體系の一部をなしている。その名稱も雷法という通稱の他に、五雷法・五雷正法・五雷天心正法・天心正法・天心五雷法など、さまざまである。五雷法と天心法に兩分する見方もあるが、一般には同一視されている。

雷法と言えば、北宋末、徽宗の信任を得て、一時權勢をほしいままにした林靈素が、これを能くしたことで知られている。<sup>(17)</sup> 若い頃、張道陵の弟子趙昇から『五雷玉書』三册一九篇を授けられてから、雷電を使役することができた。その昔、張道陵は『神霄雷書』二〇卷と雷印六顆を持って

いたが、第八代天師の時代にはもはや一〇巻しか残って  
 なかった。幸い北宋のはじめ、張守眞が翊聖眞君から五卷  
 賜わって一五卷になった。徽宗はなんとか揃えて『道藏』  
 に収録すべく、林靈素に命じたところ、果して上帝から缺  
 けた五卷を賜わり、雷印もその四顆を得たという。しかし  
 實は、やや五雷法の心得があったにすぎず、風霆を召呼し、  
 雨乞いにもたいして験がなかったとも言われているが、い  
 ずれにしても、その雷法に對する並々ならぬ執心が窺える  
 のである。而してその因つて來たるゆえんは、恐らくその  
 出自に求められるであろう。若い頃、趙昇の書を得てから  
 妖術を善くし、輔くるに五雷法を以てし、宿州(安徽鳳陽)・  
 亳州(安徽潁州)・淮安(江蘇)・泗州(江蘇)の間を徘徊し  
 ては、寺院に乞食して嫌われたというから、まさしく民間  
 を遊行する巫覡の徒なのであり、その行う雷法は妖術と目  
 されていたのである。さればこそ、なおさら張道陵との作  
 爲の關連で箔をつけ、以て正統化する必要もあつたのであ  
 る。例えば『天皇至道太清玉冊』に「漢張道陵、始有驅  
 雷役鬼之事」とあるのも、かかる思考に基づいているので

あり、事實、徽宗の道教への傾倒を踏まえて、林靈素は終  
 始、第三十代天師張繼先とも親交を重ねていたのである。

なお林靈素の故郷を、諸傳記では温州(浙江)としている  
 が、福州(福建)ともされており、傳記にも福州人士が登  
 場する。しかもその歩いた地域をつなげると、江蘇・浙  
 江・福建の、主に沿海地帯で、落雷の頻發によって、古く  
 から民間呪術的雷神信仰が醸成されている下地があつたと  
 考えられるのである。要するに雷法は、林靈素の出現によ  
 って整理集成され、劃期的發展期を迎えたのであるが、煎  
 じ詰めれば、雷法は彼にとって、榮達への踏臺になつた  
 が、逆にそれなるが故に、今まで地下潛行の隱微な妖術の  
 補助法が、一躍して地上における、公然たる正法への輝か  
 しい脱皮をとげたと稱しても、おそらく過言ではなから  
 う。

『道法會元』は『上清靈寶大法』と共に、宋代に集大成  
 された呪法儀禮書の双壁として有名である。後者は編者を  
 異にする兩書を合計しても一〇巻だが、前者は全書二六  
 八巻にも及ぶ浩瀚なものである。而してその内容は、殆ど

雷法が核心になっている観があり、含まれている種類は夥しい。『道藏』にはなお幾多の雷法關係の標題を冠した道書が収録されており、若干を擧げると、例えば雷法・五雷・雷令としては、『雷法議玄篇』・『貫斗忠孝五雷武侯祕法』・『太上說青玄雷令法行因地妙經』、天心正法には『上清天心正法』・『上清北極天心正法』・『天心正法修真道場設醮儀』などがあり、その他「雷霆」の二字を冠したのもあって、その全體に占める分量はむしろ尠くはなく、雷法の重要性を示している。しかしこれらを吟味すると、總體的に蕪雜で、主旨が標題にそぐわず、雷法とは必ずしも直結しないもの、かつて實用に供されたとは速斷できないもの、内容が斷章に過ぎたり、記述が晦澁に偏し、以て儀禮の實修を把握し難いものなどがあって、雷法の複雑な一面を覗かせているのである。

### 三 雷法行使の事例

宋代以前にも、雷を驅使した神仙方士があり、漢代沛縣（江蘇徐州）の劉憑は、その従弟が他人と土地争いで訴訟に

なったのを怒り、召雷すると電光雷鳴が轟いて、相手を卒倒させた話は、古い例である。また、若くして許眞君に師事し、唐の咸通十一年（八七〇）劉昉の重病を符で治した、洪州（江西南昌府）建昌縣の葉千詔は、足を踏み鳴らして雷を轟かせる術があるので、よく雨乞いをした。しかし雷法に關する事蹟の多くは、宋以後である。政和四年（一一一四）に歿した沅陵縣（湖南辰州府）の陳崇政は、能く雷雨を致す奇術があった。長樂縣（福建福州府）の陳通とその弟は、二人とも道術あり、能く雷雨を驅し祟りを除いた。宣和年間（一一一九～二五）京に召され、符呪がよく効いたので徽宗に悦ばれて、共に王爵に封ぜられ、歿後、人びとに神と祀られた。蜀（四川）西河の薩守堅が、龍虎山へ修行に出かける途中、すでにみな死んで昇仙した第三十代天師張繼先と王侍宸と林靈素の三人連れに遇い、林から五雷法を授かり、用いて驗あり、のち漳州（福建）で歿した。

貴溪縣（江西廣信府）の劉用光は、撫州府臨川縣（江西）で、張天師の化身である張輔元という道人といっしょになり、天心五雷法書を授けられた。南宋の慶元年間（一一九五～一

二〇〇）、衢州（浙江）で雨乞いして験あり、後また朝廷で祈雨して重用され、冲靖先生の號を賜った。<sup>88</sup> 前記の雷部神になった、南豐縣（江西建昌府）の袁千里は、端平年間（一二三四～三六）に歿したが、生前、斬勘雷法の心得があった。<sup>89</sup> 咸淳年間（一二六五～七四）錢塘西湖（浙江杭州）の陳崇貞は、雷法を善くしたので、雷院を勅建されて住み、號を冲素真人と賜った。<sup>90</sup> 黄良晤は永嘉縣（浙江温州府）眞華觀の道士で、五雷法に精しかった。<sup>91</sup> 福州府（福建）の張與玉は、黄宗師に學んで五雷法を授かり、飛神御氣の妙を得て、雨乞いすれば直ちに靈験があった。<sup>92</sup> 同じく福州府（福建）の張克眞は、崇安縣（福建建寧府）の光化寺で黄雷困の清微雷法を得た。寺中に妖狐あり、女に化けて人をたぶらかすので、雷を召して撃ち退治た。また福寧府（福建）で雨乞いしたら、程なくして雷雨が起った。人びとが送り歸すと、雷電がその家をかけめぐった。<sup>93</sup> これら高名な道士の他に、市井には名もなき法師たちの活動があったことは言うまでもないが、例えば紹興四年（一二三四）、樂平縣新進郷（江西饒州府）の陳五なる者が、疫病神に魂を拉致されて事

切れた。疫病神に強制されて供をし、瘟疫を撒き散らしつゝ、撫州府（江西）の查家に至ると、忽ち稻光がひらめき、雷鳴が天地を揺るがし、星冠をかぶった一人の道士が、劍をふりかざし、水盂を持ち、呪文を念じながら現れた。呪文が「火を發して屋を焼く」段落まで進むや、危いとさうって一目散に逃げもどり、釋放されて息をふきかえした。後日、查家に傳染病患者が出たので、道士に五雷法の加持をしてもらい、全快したという眞相がやっとわかった話<sup>94</sup>は、まさに五雷魔除け法の活寫である。そして民間で五雷法が、手軽に行われていることは蘇東坡が、彼の友人王君が、よく里人のために天心正法を行い、醫療驅邪していると述べているのに徴して理解されよう。しかのみならず、五雷法の漸盛に伴ない、『玉樞經』が普及し、普化天尊の信仰も高揚されたであろう。例えば吳（江蘇）の周擧は建炎元年（一一二七）、ひとりの道士に會い、十字經すなわち「九天應元雷聲普化天尊」の名號を唱えれば、兵刃を避け、冤を解き、壽命を延ばす功德があると教えられた。翌日、盜賊に遇い、切羽詰まって一聲誦すると、雷聲にわかにか轟

きわたり、賊は驚いて逃げ去り、命拾いしたという話がある。『玉樞經』は經文中で、その卓効を謳歌しているが、經の威力が絶大なれば、天尊の名號にさえ召雷の効があるともてはやされたのである。元代は王朝としては永續せず、また異族の統治下でもあったが、道教界の新しい動きを反映してか、雷法の株はむしろ上っていたのである。淳安縣（浙江嚴州府）の錢九五は、幼い時から五雷天心法を習っていた。山へ柴刈りに行くと、妊婦に麗されて困っている雷部の神があつたので、助けて昇天させたら、お禮に呼雷法を授けられた。ちょうど縣下が旱災だったので、祈雨するとすぐ雨が降った。のち龍虎山に赴いて、籙を受け<sup>(44)</sup>た。墜落して怪我したり、人間に捕獲された、へまな雷公の話は、雷神説話の一形式であるが、その原因として經血や産血の穢れにかかったと言うのがあり、この場合もそれであろう。いづれにしても、ここでは五雷天心法の素養が、さらに雷神傳授の呼雷法を以て強化されているのが、眼目になっているのである。衢州（浙江）の王自然は延祐年間（二三四～二〇）、道教を奉じて出家し、天童山（浙江

寧波府鄞縣）で修行して、能く雷雨を致した<sup>(45)</sup>。婺源縣（安徽徽州府）の胡月潭は、月蟾道士に師事して天心五雷の秘法を傳授され、雷を治し雨を禱るや、たちどころに感通した。また近い黟縣（安徽徽州府）の胡月澗も、雷を驅り雨を禱るにかけては、同じような腕前があつた<sup>(46)</sup>。寧遠縣北郷（湖南永州府）の劉閑雲は、若くして玄學を習い、頗る法力があつて、能く風雷を號召した。その魚池頭という所の高山は、劉が雷を會した場所である<sup>(47)</sup>。元末、四川の張羽士は、旣の張神仙に師事して、善く雷法を行い、祈禱に効果があつた<sup>(48)</sup>。

明代における道教の興隆はめざましいが、なかんずく後期に顯著で、世宗の心酔ぶりはずでに常軌を逸し、齋醮に寧日なく、國帑を浪費して亡國の一因となつた史實は周知の通りである。従つて雷神崇拜でも、例えば嘉靖三五年（一五五六）洪應雷壇に大齋を行い、<sup>(49)</sup>地方にも雷壇を建てさせているほどである。故に道士たちにも雷法が普及したのは當然であろう。嘉興縣（浙江嘉興府）の周元真道士は、二十歳の時、蘇州府（江蘇）に移住した。その五雷秘文は莫

月鼎から傳授されたもので、洪武元年（一三六八）雨乞いをして験があつた。洪武四年（一三七二）、ついに太祖に召され、「雷霆の神なるゆえん」についての御下問に對して、天人相關の見地から奉答し、帝に悦ばれた。<sup>64</sup>平民出身の洪武帝が、雷神に一方ならぬ關心をよせていたとは、けだし異例であり、民間における雷神信仰の一端を示していると言えるであろう。金臺の李徳困は、壯年になってから武當山の紫霄宮で高士曾を師として修行し、精微雷法を授けられた。洪武二年（一三九〇）、湘王が參詣した折、その修煉の功を嘉して、荊州府（湖北）の長春觀を賜つた。<sup>65</sup>贛縣（江西贛州府）の劉淵然は、幼くして出家した道士だが、のち雩都縣（江西贛州府）の紫陽宮で趙原陽の衣鉢をつぎ、能く風雷を呼召し、洪武二六年（一三九三）太祖に召された。<sup>66</sup>すなわち淨明道の嗣師も、雷法を本領としたのである。衢州府（浙江）の王充中は、洪武年間（一三六八〜九八）道會を掌ること三十餘年、八十歳の老齡になつても、なおよく雷を驅つて雨を致し、その名が外郡にまで聞えた。<sup>63</sup>餘姚縣（浙江紹興府）の楊用廣は、異人に遇つて五雷法を會得し、

永樂初年（一四〇三）戊宜良につかえ、祈禱すれば効があつた。<sup>64</sup>樂安縣（江西撫州府）の張必貞は、永樂一三年（一四一五）南京に赴く途中、老君から神書と符劍を授かつた夢を見、翌日果して路傍の石箱に納められているのを見つけた。ちょうど南京が旱災なので、祈雨したら間もなくして雷電こもごも起り、大雨になつた。手柄で廣明真人の號を賜わり、また雷神の銅像四座を賜つた。<sup>65</sup>直接雷法には觸れてないが、文脈より推して、神書とは雷法の祕傳書なればこそ、祈雨や雷神像の情節がからまっているのである。衢州府（浙江）の張伯亭は、永樂年間（一四〇三〜二四）勅を奉じて武當山（湖北）に宮觀を建てて住みこんだ。ある時、異人に遇つて五雷祕法を授けられ、祈禱すれば験があつた。<sup>66</sup>無爲州（安徽廬州府）の吳崇信は、かつて長沙（湖南）で毛真人から雷法を傳授されて、ついにその奧義を極めた。永樂年間（一四〇三〜二四）、州下が旱魃に襲われたので、祈雨したら即日豪雨になつた。<sup>67</sup>吳江縣（江蘇蘇州府）の胡道安は、元妙觀の道士で、人となりが道理をわきまえず、愚かなので「胡氣違い」と渾名された。晩年、至人に

遇つて、青城太乙雷書を授けられた。景泰年間（一四五〇—五七）吳縣（江蘇蘇州府）の日照りに雨乞いしたら、忽ち暗雲たれこめて雷雨が大いに起つた。<sup>69</sup>秀水縣象賢郷（浙江嘉興府）の沈嵩高は、蔣大方について五雷法を學び、清眞觀で道士になった。成化年間（一四六五—八七）嘉興府がひどい旱災になったので、虎骨を龍潭に投げこんで雨乞いしたら、立ちどころに大雷雹になって、充分な雨が降つた。その他にも、治病や伏邪で、往々にして験が多かつた。<sup>69</sup>温州府（浙江）玉清觀の道士葉昌齡は、ある日ひとりの老人に洞窟の中へ連れこまれて、正一五雷法を傳授されると、すぐに覺えてしまった。正徳年間（一五〇六—二二）の末頃、府下が大旱になったので、府の長官に招かれて雨乞いした。葉が「城内に降らせるのか」と問うと、長官は「苗を育てるためだから、城外に降らせて欲しい」と答えた。そこで葉は筆を取つて紙に圓を一つ畫いて、城壁を象徴し、圓外に雨降りの模様よろしく、ちよんちよんとたくさんの點を打つてから、筆を空中めがけて投げ上げるや、にわかにか白い氣が立ち昇り、雷雨がざつとやつてきた。城内は小降

りだが、城外はどこも程よい雨がゆきわたつた。<sup>69</sup>建寧府（福建）の陳仕深は、幼い時から茅山派の法術を傳授され、驅雷・遣虎・治鬼の諸法に精通していた。嘉靖年間（一五二二—六六）、將樂縣（福建延平府）が旱害にみまわれたので、乞われて雨を禱り、三日後を約束したら、果して大降りだつた。<sup>69</sup>吳縣（江蘇蘇州府）の張道修道士は、胡氣違（胡道安）に師事した。その胡氣違は莫月鼎を師として五雷法を傳授されたのである。胡は張に衣鉢を傳えようとしたが、玄妙觀では弟子が多く、人目が憚られるので、祕傳書を屋根にかくし、雨漏りにかこつけて張を昇らせ、こっそり取らせた。かくして張は奧義を極め、風雷を驅ること、神の如くであつた。某年、蘇州府で旱災がひどかつたので、長官に召されて雨乞いをした。張は水を入れた壺を用意させると、ふざけながら符を書き、一枚できあがるごとに、水に投げ入れさせると、上に雲氣がただよい、凝集すると、雷が轟然と炸裂して、大雨になった。張がさらに雷神に向つて「汚職する役人ばらを撃ち殺せ」と呼ばれるや、並居る官吏は恐れをなして、いっせいに平伏した。ま

た江陰縣（江蘇常州府）が旱魃の際、周という富豪に祈雨を頼まれたが、行って見ると穀物がどっさり隠匿してあるの腹にすえかね、禱って雷雨が大いに起ると、「惡徳長者だから、倉を焼いてくれ」と雷神に指示するや、雷火がその家を駆けめぐり、殆ど灰燼に歸してしまった。<sup>62</sup> 浙江の唐秩は、大梵斗母五雷法の心得があり、祐聖觀で雨乞いすると、忽ちにして雲が湧き、篠突く大雨になった。<sup>63</sup> 蘇州府（江蘇）の顧元本道士は、方々を渡り歩いているうち、異人に遇って五雷符訣を傳授され、歸って試すと、甚だ効き目があった。嘉定縣（江蘇太倉州）が大旱の時、縣令の使者が来て祈雨を頼んだ。顧はちょうど犬肉を食べている最中なので、無造作に肉汁で、瓦に符を書いて持ち歸らせた。縣令が怒って瓦を投げ棄てたら、碎け散ると共に、雷鳴を發して大雨が降り注いだ。<sup>64</sup> 浙江の周禎は、幼くして儒學の勉強をしたが、五雷法にも精通していた。たまたま早歲にあたり、雨乞いすることになった。「天には雨はないが、西湖には水があるではないか」と言つて、大きな鏡を取りよせ、筆に墨をふくませて鏡面を塗りつぶして行くど、その

塗った方角から次第に黒雲が湧き起り、しばらくすると叢つて、どしゃ降りになった。西湖はと見れば、水が半分ぐらいに減つていた。<sup>65</sup> 貴州の劉明德は若い時、異人に遇つて五雷秘法を傳授され、能く風雨を呼召し、鬼神を奔走させ、およそおはらいに、驗のないことはなかった。<sup>66</sup> 嘉興府（浙江）の張大倫は、兒童の時から道教を信奉し、龍虎山（江西廣信府貴溪縣）に往來して五雷大法を修煉した。そして傳染病が流行すると、符水の治療で全快した者が頗る多かつた。<sup>67</sup> 道士がじかに行う雷法ではないが、張天師の雷符が妖怪退治に威力を發揮した話もある。福建南平縣（延平府）廖姓の娘が、化物にとりつかれた。江西龍虎山太乙眞人の符があらたかだと聞いて、家人が參詣し、三枚もらつて歸つた。庭で焼くと、柱の中から雷が起り、大きな鼠が一匹跳び出したが、すぐ撃たれて死に、娘は平癒した。また張の息子が妖怪に祟られて、腹に穴をあけられ、腸がはみ出た。萬曆四年（一五七六）、張が商用で湖南に出かけたついでに、太和山に參詣すると、ちょうど張眞人が醮を行いに來合せていたので、符を三枚いただいたて歸り、しきた

り通りに焼くと、果して雷が鳴り、祟りが絶えた。<sup>68</sup>

清代は道教の衰微につれて、雷法も下降線をたどらざるを得なくなるが、その若干を示せば、次の如き例がある。

修武縣(河南懷德府)の郭靜中は若い時、華陰縣(陝西同州府)で劉という異人に遇つて金丹術と五雷法を傳授され、雨乞いが得意だった。雷印を握つて叩けば、そのとたんに雷が鳴つて大雨が降るのである。他所から招きに來る者が多すぎると、ただ符を一枚書いて渡すだけだが、使者が地元に着くや否や、雨がざつとやつて來る。數百歳だが、いつまでも童顔で、順治初年(一六四四)に歿した。<sup>69</sup> 吳縣(江蘇

蘇州府)の施道淵は、少年時代から朝眞觀で道士になつたが、十七歳で龍虎山(江西)に赴き、徐堪癡に入門して五雷法を學んだ。のち順治五年(一六四八)、吳山(吳縣)に室を築いて修煉した。<sup>70</sup> 長洲縣(江蘇蘇州府)の周世徳は、若くして鄧寄虛に師事して道士となつたが、二十歳で龍虎山(江西)の夏衢について、清微五雷や祛邪治病などの法を學び、洪水や旱災に祈禱すれば感應せざるはなかつた。<sup>71</sup>

蘇州(江蘇)の陶汝恭は、嘉慶元年(一七九六)女鬼に祟ら

れて井戸に投身したが、幸い家族に引張り上げられて助かつた。しかし痴呆症になつてしまつたので、家族が心配して、病狀を張眞人に訴えた。たまたま眞人が他用で蘇州に來ると、郷という法師に命じ、法を行つて鬼怪を薙にとじこめ、蓋に「天火雷」の三字を書き、四邊にそれぞれ符を貼つたら、陶の病がけろりと治つた。ところがある時、子供がいたずらに蓋を開けたら、再び痴呆になり、一年餘りで死に、その家も没落した。<sup>72</sup> これは張天師が親しく指揮した、珍しい例である。

小説・戯曲に散見する雷法も、實情を反映して、明代に集中している。まず『西遊記』<sup>73</sup>では、車遲國で孫悟空が虎精たる虎力大仙と祈雨で驗比べするくだりで、虎精が法を行つと、鄧天君が雷公・電母を伴つて降臨した。悟空がなじると天君は、「あの道士の五雷法は本物です。彼が文書を發し、文檄を燒いたので、玉帝が驚かれて、直ちに九天應元雷聲普化天尊府に旨を傳え、我等が命を奉じて、雷電で雨を降らせに來たのです」と答えた。すなわち五雷法とは、玉皇上帝を通じて、普化天尊の雷部に雷神の派遣を要請

できる大法なのである。次に『金瓶梅』<sup>74</sup>では、李瓶児は夫たる花子虚の死後、西門慶の妾になったので、祟られて重態に陥った。そこで應伯爵が西門に祟鬼の驅逐を勧め、「五岳觀の潘道士は天心五雷法が得意でして、どんな祟りでも退治してしまうものだから、潘捉鬼と渾名されている程だ」と言った。舞臺は山東で、恐らくその地方では道士ならば雷法ができ、また治鬼には雷法が特効ありと一般に信じられていたの寫實であろう。さらに白蛇傳では、蘇州で許宣の妖氣を指摘した道士に、白娘子が勝負を挑むくんだり有名である。すなわち『警世通言』<sup>75</sup>に、終南山からやって來たと言う道士は、「わしがやるのは五雷天心正法じゃ。いかなる妖怪でも、わしの符を飲んだが最後、たちまち正體がばれるぞ」とおどかすが、白娘子はその場で飲んで見せ、かえって道士をこらしめたのである。『清平山堂話本』<sup>76</sup>には、洛陽の潘松なる者が花見に行くと、白鷄・赤斑蛇・白猫の妖怪どもにつかまされたが脱出し、途中で天應觀の道士徐守眞に出會った。徐が「私は天心正法を行い、邪祟を捉えるのが専門だよ」と言って、いっしょに退治にでかけ

たが果せず、ついにその師嵩山の蔣真人のお出ましを乞うて、やっと收服した。雜劇の『鎖白猿』<sup>77</sup>も、杭州の沈璧という豪商が、妻子家宅を白猿精に強奪されたのを時玄眞人がとりおさえる神仙收妖譚だが、まずへば法師をやとつて來て、かなわずに退散するくだりである。法師は登場すると「わしはこの雲清庵の住持蹇道元で、やるのは五雷天心正法じゃ。妖を斬り邪を縛する腕前にかけて、誰知らぬ者はない」と見えを切り、續いて登場する使者も、「この蹇道元っていう者は、五雷天心正法が得意でして、化物退治は朝飯前だろう。どれ、一走り行って來るか」という臺詞である。法力を銜うのに、五雷天心正法が出しに使われているのであり、民間でもそのように受け取られているのである。ありきたりの收妖治鬼譚ではなく、妖巫の行う黒巫術に對抗する例としては、『醒世恒言』<sup>78</sup>に、宋代は徽宗皇帝の寵妃、韓夫人が病氣になり、楊太尉邸で養生していると、二郎神廟の廟官になりすましている孫神通という妖巫が、夜な夜な二郎神に化けて情を通じた。楊太尉はその妖法を破るべく、専ら五雷天心正法を行持する五岳觀の潘

道士に頼んだ。番は鬪法のすえ、相手の靴を打ち落とし、それが證據品となって惡黨を逮捕し、極刑に處した。まさしく「五雷天心」は顯正破邪の、「邪法」に對する「正法」なのである。

#### 四 掌心雷

廣範な雷法のうちでも、人びとの興味は主に掌心雷に注がれている。雷を握りしめて、投げつけたら忽ち雷鳴がするという、やはり驅雷の一法である。普通、「掌を以て五雷法を行う」から、掌心雷と言われ、また掌中雷とも稱し、掌心蠻雷あるいは法雷とも呼ばれている。掌心雷法は五雷法(五雷天心正法)と同義に解されている向きもあれば、兩者を對等の別法(別)とみなしているものもある。しかしこれはあくまで範圍の問題であつて、常識的にも、數ある雷法は悉く掌で施行するとは限らず、従つて掌心雷法は雷法の一部にすぎないのである。

元代、南昌府(江西)浮雲宮の道士夏主信は、掌心雷で石精を退治した。その石は後でも神と祀られ、雨乞いや雨止め

に、祈れば効驗があつた。<sup>(8)</sup> 潘濟因は金陵(南京)の人だが、明の洪武初年(一三六八)全椒縣(安徽滁洲)に移り、白鶴觀や城隍廟などを創建し、早魃になると、掌心雷で雨を降らせたので、人びとにありがたられた。<sup>(9)</sup> 温州府(浙江)の顧太眞は、麻衣道人に遇つて掌心雷法を授けられ、能く雨暘を指呼し、風雷を叱咤した。洪武十九年(一三八六)夏の旱災に、祈雨のため壇に登つたら、雷電こもごも至り、大雨が三日間も續いて降つた。<sup>(10)</sup> 貴州の張道人は、雨乞いの秘術を心得ていた。萬曆年間(一五七三—一六二〇)の日照りで、巡撫に招かれ、五雷訣を使つて祈雨し、翌日正午に必ず降ると斷言した。ところが時刻になつても空がからりと晴れわたつていたので、人びとが危んでいると、張はひとりの兒童の掌に符を書き、握りしめて、巡撫に「雨童子を迎えよ」と命じた。兒童が役所に着いて、握り拳をあけるや、忽ちにして霹靂一聲、霖雨が降り注いだ。<sup>(11)</sup> 樂清縣(浙江温州府)の包雷淵は、法を龍虎山に學び、掌を以て五雷法を行い、妖祟を治すること、立ち所に効果があつた。<sup>(12)</sup> 通俗小説では『警世通言』<sup>(13)</sup>に、許眞君と摩龍の交戦中、

觀戰していた吳猛が師の助太刀をするくんだり、吳が掌心蠻雷を、大空めがけて投げ上げた。これは吳が専ら妖怪を打つ法雷である。孽龍は天地に轟きわたる法雷を聞くと、魂も身につかぬばかりに驚いて逃げ去ったのである。

これらはすべて驅邪か祈雨のために行っているのであるが、先の張道人の如く、兒童に行わせる場合は、單なる遊戯として、賣雷型の傳説ともなるのである。唐代、縉雲縣（浙江處州府）の趙初暘は、生れつき右の掌に「雷使」という赤い二字がついていた。のちに道術を學び、呼吸で雷雨をもたらすことができた。時たま、小兒の掌に「雷」の字を書いて握らせ、開けると雷が鳴った。この雷鳴はまた、魔除けにもなるのである。かつて臨安縣（浙江杭州府）で雷を賣ったことがあり、墨汁で符を畫いたら、降った雨が黒かったのだ。趙賣雷とか趙雷使などと、渾名をつけられた。<sup>69</sup> 昆明縣（雲南雲南府）の徐道廣は、蔣日和から五雷法を學び、その術に精通した。よく小兒の掌中に符を書き、しっかりと握りしめ、人の居ない所へ行つて開けると、雷が掌から起つた。面白いので大勢の子供にせがまれ、いつしか

慣れつこになつてしまつた。眞慶觀の祟りを鎮めたことがあり、死後、嘉靖年間（一五三二—一五六）雷霆都司に封ぜられた。<sup>69</sup> 今に傳わり、最も有名なのが福建南部一帯に分布する董仙賣雷の話である。泉州の董伯華は、乞食に身をやつた仙人に天台山・洞庭湖へ連れて行かれた。歸りの路用がないので、仙人は董の掌に「雷」の字を書いてやり、「空中に向けて一擲すれば雷が鳴るから、道々雷を賣ればよい」と教えた。董はその通り、道すがら子供たちに雷を賣つて無事に歸つた。ある時、府知事の裁判中に、董が子供たちに雷を賣つて鳴らしたら、知事はその案件は無實かも知れないと思つて退場しようとした。あとで原因がわかり、董は捕えられたが、尸解して仙人になつた。<sup>69</sup> 泉州府晉江縣の董伯華は、ある日八仙に遇い、李鐵拐に遠方へ連れて行かれ、仙法を傳授され、雷石という小石を一個もらつた。そして歸る途中、旅費がなくなると、小石で小供の掌に「雷」の字を書いて握らせ、開けると雷が鳴る。このように雷を賣つて、三ヶ月後にやつと故郷にたどりついた。ある時、府知事が賄賂を取つて善人を陥れようとしたの

で、董は子供たちを集め、掌にそれぞれ「雷」を書き、握って役所の前で待ちかまえ、裁判が始まると、一齊に手を開けたので、雷がごろごろ鳴り続け、府知事は昏倒してしまった。あとで董の仕業とわかり、捕われて獄死したが、實は昇仙したのであり、神に祀られた。また明代の出来事で、七仙に雷公石を授かり、辟邪の作用があると言われ、用法も掌に丸い輪を一つ畫くだけで、歸ってからでも雷を賣って老母に孝行し、雷鳴で役所を騒がせたのは兒童ではなくして觀衆にしている物語もある。このように掌心雷を行うには、掌中に文字や符號を書くとか、雷公石の如き特別な呪物が必要であるとされているが、呪法を行使するからには、なお掌心雷神呪を念じ、指を屈する掌心雷指訣も必須であるとされ、その一法が坊間の符呪書にも記されている。

## 五 臺灣の雷法

臺灣の雷神信仰は、冒頭において一言したが、五雷元帥を本尊とする廟が二ヶ所あり、妖邪收服の縁起が傳

えられており、神誕も普化天尊の六月二十四日をあてている。その他の廟宇にも、たまに電母に對する雷公として副祀されているのがある。その他にも例えば、樓閣の驅邪法として、鐘樓・鼓樓に「九天應元雷聲普化天尊」と横書して懸けたら萬凶を化して吉となすとか、魔除けとして帯びる辟邪錢に召雷呪が鑄こまれたりしている。三奶教や閩山教などの法教が制煞を行う法場では、普化天尊の畫像を懸けることがあり、また五雷元帥が一行に飛翔しながら、雷火を驅って、女妖を追撃している圖柄をあしらった繪卷が使用されており、その唱える「請五雷呪」が坊間の符呪書にも見えており、符録には「雷」字がふんだんに書かれているのである。

臺灣の道士は吉禮しか行わない紅頭と、喪葬儀禮にもたずさわる烏頭とに分かれるが、いずれも天師教派に屬する。従って雷神にも關心が強く、自家の壇號に「雷」字を冠せるものがある。しかし現今、道教の全般的な衰微頽廢に伴って、もはやまとまった雷儀は傳承されておらず、道士たちも雷法という觀念が極めて稀薄で、僅かに醮祭において

法器・神像・經懺・科儀の各面から、その残存を窺い知れるのみである。

まず法器の雷令が擧げられる。五雷牌とも稱し、高さ約一八センチ、幅約七センチ、厚さ約三センチで、頂上が圓く、底が平たい木製の札である。正面に「五雷號令」、背面に「總召萬靈」、兩側面に二十八宿の名稱を刻したものが多し。上圓下方がその形態の特長で、天地を象徴し、神靈を召致送迎する、極めて神聖な法器である。また雷神を使役して辟邪する作用もあり、天師教派が得意とする法術であるため、常用されており、張天師の畫像にもよくあらわれている。中國大陸でも道士や法師に廣く使われているが、形態や文様にかんがりの相違がある。臺灣の醮祭でも、紅頭と烏頭とは、用途における重點が同じくない。すなわち紅頭では辟邪淨境が重點になっており、祭典の最初における封山禁水科儀、中段の勅水禁壇科儀、後尾の勅符謝壇科儀で多用されている。これに反し、烏頭は召神遣將に重點を置き、發表・宿啓・早朝・午朝・晩朝・登臺拜表・正醮など七場の「表文」を焚化して天庭に届ける科儀

で使われる。しかし辟邪が全くなおざりにされている譯ではなく、副次的には宿啓科儀における斬命魔の齣で、封鬼門に用いられているのである。

神像としては、烏頭の一部で、普化天尊の紙張り小神像（高さ約三〇センチ）を醮場に勧請する者がある。三清宮の三清掛軸の前に奉安し、祭典後、天師・北帝・六騎・平安軍などの臨時性紙張り神像もろとも、焚化して昇天させる。特別この神像に對する儀式はないが、普化天尊が終始醮祭をみそなはされているという心意をこめていたのである。

經懺には、『玉樞經』の誦讀がある。紅頭はこれを『雷霆感應玉樞寶經』或は『太上感應玉樞寶經』と尊稱し、殊に重視しており、三朝醮の場合、第二日午前中の「午朝」科儀に引き續いて誦される。烏頭では本醮に先立って付隨的に行われる一朝の火醮に組み込まれ、午前中に『北斗經』や『三官經』と共に誦讀されるにすぎない。

科儀としては、紅頭の行方「洪文夾讚」が最も顯著である。三朝醮の場合、第三日目の午前中に組み込まれる。「洪文」とは『玉樞經』を指し、念經の相間に讚語を織り

込むから「夾讚」と言うのである。二人でまず三清壇の科儀卓前で行つてから、三清壇と三界壇の中間に設けられた應元府(經卓二脚を、約五〜六メートル離れて、向い合せに置く)に移り、左右に分坐して對誦あるいは合誦して、普化天尊の功德を讚仰する莊嚴な科儀である。烏頭が行う科儀では、瘟醮に「關五雷」があり、「關五雷神燈」とも稱し、醮祭の幾朝たるを問わず、本醮が終つてから、改めて王府で、「和瘟淨醮」と共に行う特別な科儀である。現行では雷稱を用いた唯一の科儀ではあるが、主旨は雷神に對して收瘟を祈願するにあり、五雷とは五方に配した五雷王で、實は五方行瘟使者と習合しており、従つて純粹の雷儀ではなく、まして卓上に神燈をしつらえ、文中にも「神燈一照」とあるように、燈儀ともからまつているのである。

## 六 結 語

敍上の諸事例から、およそ次の如き事項が歸納され得るのであろう。雷法の稱謂がかなり多く、變化に富んでいることは、それがいかに深く民衆に受け容れられているかを示

している。雷法を行う道士の多くが龍虎山と關係していることは、天師教における雷法の重視を示している。地域がほぼ東南沿海に偏っていることは、多雨地帯の落雷瀕發という氣象條件が、雷法發達の下地になっている。雷法は魔除けのみならず、雨乞いにもよく行使されていることは、農民こそ雷法の厚い支持層であることを示している。雷法は雷鳴とその破壊力のみならず、雷火をも重視しており、これを介して、聖火觀念に基づく火法ともかわりあつてゐる。雷法はあらゆる呪法のうちで、最も攻撃性が強く、この點では守勢に立脚する燈法とは對照的であり、民衆にその卓効が信賴されているわけである。

おもうに天師教は、漢民族の雷神に對する長敬の念に偏重した信仰という素地を踏まえて、雷法を創造し、ついに自家藥籠中の祕法となし、さらに進んで氣象をも操縦できるという民衆の認識を勝ち得たのである。そして天師教が、法力無邊にして、加持祈禱を得意とすることは、とりもなおさず他の大教派に比して、より巫術的色彩が濃厚であり、道士の所業は巫覡に近いと見られるに至つたのであ

る。

巫覡は、道教より低層位の「法教」に屬し、その主流は三奶教だが、教主たる臨水夫人は、傳説的法統では閩山許眞君の直系になっており、三奶教と閩山教は實體が同一なのである。しかし、法教に明確な雷法はなく、法師は雷令を持たず、使用もできない。

一方、許眞君は臨水夫人に雷法を傳えたと言われており、而して許眞君の「淨明五雷諸法術」はその師たる黃堂謹母から授けられたことになっている。

かくの如く、やや矛盾はあるにしても、雷法及び雷令からんで、天師教と淨明道の脈絡が考えられ、さらに淨明道と法教の関係、すなわち現在の三奶教こそ淨明道の後身ないし殘存ではなからうかと臆測され、將來の研究課題として殘されているのである。

註(1) 臺灣總督府編『臺日大辭典』昭和六年・臺北。以下二句も

同じ。

(2) 周? 撰者不詳『山海經』海內東經。

(3) 同右 海內經。

(4) 同右 大荒東經、註。

(5) 戰國 楚 屈原撰「離騷」。

(6) 漢 劉安撰「淮南子」倣眞訓。

(7) 唐 沈既濟撰「雷民傳」(『龍威秘書』本)。

唐 房千里撰「投荒雜錄」(『太平廣記』三九四卷・雷類二・陳義)。

宋 周去非撰「嶺外代答」卷一〇・志異門・天神。

元 撰者不詳「三教源流搜神大全」卷七・五雷神。

撰者不詳「搜神記」卷一・雷神(『續道藏』高字)。

明 談孺木撰「棗林雜俎」和集・幽冥・雷廟。

明 李賢等撰「大明一統志」卷八二・廉州府・祠廟・雷公廟。

洪鍾鑒「雷祖陳文玉公故事」(中山大學編「民俗週刊」四七期・民國一八年・廣州)。

(8) 「九天應元雷聲普化天尊玉樞寶經」(『道藏』洞眞部・本文類・盈字下)。

『玉樞寶經』(重刊『道藏輯要』斗集)。

宋 白玉蟾撰「九天應元雷聲普化天尊玉樞寶經集註」(『道藏』洞眞部・玉訣類・收字下)。

(9) 「九天應元雷聲普化天尊玉樞寶懺」(『道藏』洞眞部・威儀類・結字下)。

『太上雷聲普化天尊消災佑民法懺』(重刊『道藏輯要』柳集・懺法大觀)。

- (10) 明 陸西星撰『封神演義』九九回・姜子牙歸國封神。天君二一名に雲・風・電の三神を加えた二四員である。
- (11) 『三教源流搜神大全』卷二・袁千里。但し『搜神記』（『續道藏』本）卷二・袁千里は、雷雲第二判官となす。
- (12) 『事物異名錄』神鬼・雷神には『明道雜志』を引いて「雷部中神名、主行火」となし、歐陽修『跋謝仙火字』には「雷部中鬼、……掌行火於世間」となす。
- (13) 故事は『法苑珠林』に出で、新家に棲む女鬼であるが、『故事成語考』天文には「雷部推車之女」となす。
- (14) 唐 李匡乂撰『資暇集』中卷・急急如律令條に、「是雷邊捷鬼、……此鬼善走、與雷相疾速」とある。
- (15) 清 袁枚撰『子不語』卷八・雷部三爺。
- (16) 明 朱權撰『天皇至道太清玉冊』（『續道藏』陪字）二卷二三葉には、五雷法と天心法を分け、「天心乃萬法之祖」として、後者を根本とみなしている。
- (17) 宮川尚志「林靈素と宋の徽宗」（『東海大學紀要文學部』二四輯・昭和五〇年）。
- (18) 元 趙道一撰『歷世眞仙體道通鑑』（『道藏』洞眞部・記傳類・鹹く潛字）卷五三・林靈素。
- (19) 元 脫脫撰『宋史』卷四六二・列傳二二一・方技下。
- (20) 宋 趙與時撰『賓退錄』卷一。『宋史』。
- (21) 『天皇至道太清玉冊』三卷三四葉。
- (22) 『搜神記』（『續道藏』高字）卷二・薩眞人。

雷神信仰と雷法の展開

- (23) 『道法會元』（『道藏』正一部・移く盤字）。
- (24) 王契眞編『上清靈寶大法』（『道藏』正一部・鬱く禽字）。金允中編『上清靈寶大法』（『道藏』正一部・獸く靈字）。
- (25) 『雷法議玄篇』（『道藏』正一部・席字下）。
- (26) 『貫斗忠孝五雷武侯秘法』（『道藏』洞玄部・衆術類・五字中）。
- (27) 『太上說青玄雷令法行因地妙經』（『道藏』正一部・滿字上）。
- (28) 『上清天心正法』（『道藏』洞玄部・方法類・四字）。
- (29) 『上清北極天心正法』（『道藏』洞玄部・方法類・四字下）。
- (30) 『天心正法修真道場設醮儀』（『道藏』洞神部・威儀類・則字上）。
- (31) 晉 葛洪撰『神仙傳』卷五・劉憑。
- (32) 南唐 沈汾撰『續仙傳』（『道藏』洞眞部・記傳類・海字下）中卷・葉千韶。
- (33) 『辰州府志』（『古今圖書集成』博物彙編・神異典卷二八五・方士部・列傳三・宋二）。以下「神異典」と略稱。
- (34) 明 何喬遠撰『閩書』卷一三八・方外志・仙道・福州府・宋。
- (35) 『歷世眞仙體道通鑑』續篇（羽字上）卷四・薩守堅。
- (36) 『三教源流搜神大全』卷二・薩眞人。
- (37) 『搜神記』（『續道藏』）卷二・薩眞人。
- (38) 『廣信府志』（『神異典』卷二八五・方士部・列傳三・宋二）。
- (39) 註(1)に同じ。『玉樞經』には、五雷斬勘之司という死刑執

雷神信仰と雷法の展開

行の役所が記されており、『天皇至道太清玉册』三卷二七葉には、五雷法とは別に、五雷斬勘法を擧げている。

63 追雲燕著『三教聖誕千秋録』一二二頁・民國六八年・臺中。

63 『處州府志』〔神異典〕卷二八五・方士部・列傳三・宋

二)。

64 『閩書』卷一三八・方外志・仙道・福州府・宋。

64) 同右。

64) 宋 蘇軾撰『東坡志林』卷三・記天心正法呪。同人撰『仇

池筆記』。

63 宋 洪邁撰『夷堅志』丙志・卷六・十字經。

64 『浙江通志』〔神異典〕卷二八六・方士部・列傳四・元)。

64) 『衢州府志』(同右)。

64) 『江南通志』(同右)。

64) 『寧遠縣志』(同右)。

64) 『四川總志』〔神異典〕卷二五五・神仙部・列傳三二・元)。

64) 明 何喬遠撰『名山藏』卷二六・典讀記。

64) 『蘇州府志』〔神異典〕卷二八七・方士部・列傳五・明

一)。

61) 『武當山志』(同右)。

62) 『明外史』劉淵然傳(同右)。而して『神異典』所引の『江

西通志』は「陳方外を師として雷法を授かり、風雷を呼召し

て驗あり」となし、『徐州志』には「異人に遇い、授けるに

祕書を以てし、風雷を呼召し、鬼物を劾治す」となす。また『明史』卷二九九、『明史稿』卷二八一などの正史にも「頗る能く風雷を呼召す」とある。

63 『衢州府志』(同右)。

64 『雲南通志』(同右)。

63) 『樂安縣志』(同右)。

66) 『衢州府志』〔神異典〕卷二五六・神仙部・列傳三三・明

一)。

67) 明 吳臻修『無爲州志』卷八・人物志・仙釋・國朝。

68) 『蘇州府志』〔神異典〕卷二八七・方士部・列傳五・明

一)。

69) 『嘉興府志』(同右)。

60) 『温州府志』(同右)。

61) 『福建通志』(同右)。

62) 明 徐禎卿撰『異林』張皮雀。

63) 『浙江通志』〔神異典〕卷二五九・神仙部・列傳三六・明

四)。

64) 『蘇州府志』〔神異典〕卷二八八・方士部・列傳六・明

一)。

63) 『浙江通志』(同右)。

66) 『貴州通志』(同右)。

67) 『嘉興府志』(同右)。

69) 明 王同軌撰『耳談』(耳譚)卷三・廖氏處子・張氏婦。

- 69 『山西通志』(「神異典」)卷二五九・神仙部・列傳三六・皇清)。
- 70 『蘇州府志』(「神異典」)卷二八八・方士部・列傳六・皇清)。
- 71 同右。
- 72 清 錢泳撰『履園叢話』卷一六・精怪。
- 73 明 吳承恩撰『西遊記』四五回・車遲國猴王顯法。
- 74 明 笑笑生撰『金瓶梅詞話』六二回・潘道士解禳祭燈法。
- 75 明 馮夢龍撰『警世通言』卷二八・白娘子永鎮雷峰塔。清 墨浪子撰『西湖佳話』卷一五・雷峰怪蹟も同工異曲である。
- 76 明 洪楨輯『清平山堂話本』洛陽三怪記。
- 77 明 撰者不詳『時真人四聖鎖白猿』二折。
- 78 明 馮夢龍撰『醒世恒言』卷一三・勘皮靴單證二郎神。
- 79 『天皇至道太清玉冊』三卷二七葉。
- 80 『南昌郡乘』(「神異典」)卷二八六・方士部・列傳四・元)。
- 81 『濠州志』(同右卷二八七・方士部・列傳五・明一)。
- 82 『濠州府志』(同右)。
- 83 『貴州通志』(同右卷二八八・方士部・列傳六・明二)。
- 84 『温州府志』(同右)。
- 85 『警世通言』卷三九・旌陽宮鐵樹鎮妖。
- 86 『處州府志』(「神異典」)卷二八四・方士部・列傳二・唐)。
- 清 雍正一年 曹掄彬修『處州府志』卷一三・人物・仙釋。
- 87 『雲南通志』(「神異典」)卷二八七・方士部・列傳五・明一)。
- 88 頑眞「董仙的傳說」(中山大學編『民俗週刊』四五期・民國一七年・廣州)。
- 89 董瑞龍「董仙賣雷」(林蘭編『民間故事』二集・民國二〇年・上海)。
- 吳守禮譯「雷寶りの董仙人」昭和一五年・創元社。
- 90 王世禎編「中國神話」事迹篇・泉州雷公石・民國七〇年・臺北。
- 91 大山書局編「太上老君符訣」一〇三頁・民國六八年・臺南。
- 92 片岡巖編「臺灣風俗志」九六二頁・大正一〇年・臺北。
- 93 「太上老君符訣」一三二頁。
- 94 基隆市李振勝道士は壇號を雷成壇と稱す。
- 95 例えば雲林縣褒忠鄉馬鳴山鎮安宮の瘟醮における蔡羽士道士。